文献資料紹介《第68回》

【屋久島雑筆（上）】

山本秀雄

はしがき

屋久島の豊富な水資源を活用して、発電事業を興そうとする構想は、かなり古くからあった。明治三十年代から鹿児島電気、大正・昭和期に入って昭和電工、日本窒素、神戸製鋼等が、注目していた。

支那事変、満州事変、大東亜戦争に突入して電気問題は再び着目されるが、同時に戦略物資の生産・輸送・集積・中継基地として、屋久島は新たに脚光を浴びる。昭和十六年、海軍の設営隊（隊長＝仁藤矩夫海軍少佐）が派遣され、「武士（つわもの）どもの夢の跡」は楠川に深井戸や防空壕跡を残している。

戦後の電力調査は県の要請に出たもので、詳細な『屋久島電源開発調査書』が作られた。これを踏まえて昭和二十七年、屋久島の豊富低廉な電力資源を実用化し、化学工業を興すとともに電力の一部を九州本土へ海底送電する等の計画をもって、屋久島電気興業（屋久島電工の前身、昭和三十三年社名変更）が設立された。

『屋久島雑筆』の筆者、梶山龍耳（本名浅次郎）氏は、この電源開発に深くかかわった人である。前記調査書は県の委嘱を受けた社団法人・日本産業再建技術協会が昭和二十四年、二次にわたる現地調査にもとづいて取りまとめたものであるが、梶山氏は同協会鹿児島支部長として屋久島に滞在し、直接調査に当った。

『雑筆』端書に「筆者は電源開発の使命を帯び滞島六年、如上の風物に接しつつ暇つぶしにものしたのが　此の雑筆である。（昭和二十九年春）」とある。また、本文終章は、「われら此の度、此の宝庫を／拓かんの使命を授けらる／幾とせの経験と工人の熱血は燃えて／胸は高鳴りし／腕は震えて止まず（昭和二十四年春記）」の詩句で結ばれている。

屋久島電気興業の設立後、梶山氏は同社発電部長として事業に携わった。昭和三十五年十二月、脳溢血にて急逝された。

『雑筆』は昭和二十九年七月、孔版で上梓されており、今年が丁度五十年目にあたる。当時の屋久島の様子を伝える面白い資料なので、今号と次号の二回に分けて抜粋紹介させて頂く。

屋久島雑筆　梶山龍耳

安房と吊橋

安房には吊橋がある。これは名物と言うよりもっと切実な用をなして居る。即ちこれで河口両岸に跨る安房部落の連絡をして居るばかりでなく、島の周回道路の要衝となって居る。

安房部落は人口三千余、戸数五百、左岸は狭い低地に家屋が密集して一寸とした街をなして居り、旅館四、五軒、飲屋六、七軒、商店二十余軒、床屋三軒、郵便局、自動車発着所、映画館などあり。背後は稍高い標高三、四十米の台地となって居る。右岸は低い平地は殆んど無く直ちに標高三十米ばかりの台地で、橋の取付の傾斜部分に多少の家屋が散在し、更に台地上の尾之間街道に接して新開の街が出来そうな形勢にある。

吊橋は径間百米ばかり、橋面は満潮面上約八米で稍高い。両岸には太い高さ十二米位の

混凝土造の門柱が聳立し、これに直径五十粍の鋼索五本を束ねたのが両側に架けられて主索となし、木造補剛トラス付の橋桁が一文字に吊られて居る。橋面は巾二・五米、床は木造の縦桁に厚六糎の橋板が張ってある。バスもトラックも平気で通る。

此の橋は元来熊本営林局が屋久島周回林道の一環として大正十年頃架けたものだが、今は寧ろ一般の交通が全部と言ってよい。曩の太平洋戦争で爆撃されて落とされたのを終戦直後復旧したもので、吊主索は元は六條を一束にしたものだったが一條は爆弾の為使えなくなり、今は五條を一束にしたものであり、門柱にも所々弾痕が残って居る。

舟で安房港につくと濃緑の屋久島の山々を背景に此の橋が白く浮いて見え、中々景色が良い。

橋上夏の夕涼みは殊に良い。第一蚊が居らぬ。橋の中程に佇めば、電灯の美しい両岸、それがヒタヒタと寄せ来る満潮に映り、覚えず歌でも歌って見度くなる。

筆者は此の橋について色々の思い出がある。或る夏の夜にみかん箱か何か持ち出して腰かけ、夜更け迄尺八を吹いた事もある。

又、去ぬるデラ台風の時だったと思う。安房川未曾有の大洪水で、折柄調査に来ていた筆者は此の機を逸せずと、同僚の甲斐君と浮子、ストップウォッチ、測桿などを吊橋の上に持ち出して洪水量の測定を行った。吹きつのる暴風で橋の中央は二米ばかり上流の方に吹き撓められ、降りしきる豪雨の中を這って橋の上を移動しつつ、一時間ばかりの一測定を数回繰り返し遂行した。宿の主人達は気狂い沙汰だ、止しなさいと言ったけれど、かまわずやってのけた。その時の結果は後日貴重な記録となり、電源開発の一役をなして居るので、思い出してほほ笑ましくなる。

橋桁や橋板など皆木造だから、時々朽ちて二、三年毎に修繕が行われて居るが、殊に両側補剛トラスがもう駄目となり、近く大修繕を必要とするに至って居る。願わくば木造部分は全部鉄筋混凝土等に取替えられ、半永久的な生命を興えられん事を祈ってやまない。

浮舟（はしけ）

島では舟が来たとなると何も彼も放擲して浮舟に集る。乗客を満載した浮舟は遥か沖に碇泊した本船に向って漕ぎ出して行く。

海の静かな時は気持がよい。五挺櫓で常緑の安房河口を漕ぎ出でて二、三十分で本船につく。そして順次タラップを伝って乗船し、切符を渡して各々船室に這入って行く。降りる客は戻りの浮舟で上陸する訳だ。上陸も亦楽しい。出迎えの人々を目の前に砂浜に下り立った気持は又格別だ。

然るに一朝時化るときは事だ。河口に突出た岩礁に猛り狂う怒涛の中を、浮きつ沈みつ潮を冠りながら本船に近づく迄全く生きた心地は無い。今にもヒックリ反らぬかと乗客は知るも知らぬも互にしがみつき合う。本船に着いても浮舟は本船の船腹にドシンドシンと衝き当り、ぐらつく足を踏みしめつつ船員につかまってタラップに飛び移る。女子供には無理な放れ術だ。全く船員に荷物扱いされてタラップにしがみつく外はない。

波がもっとひどい時はタラップは上げて仕舞い、高い甲板の手摺を一ヶ所はづし、浮舟が波の為に甲板の高さまでもり上ったときヒョイと本船に飛び移る。全くスポーツですね。

然しまだ乗る時はよいが、下船の為浮舟に移るときは全く悲壮な感がする。浮舟はもり上って甲板の高さになったり又ぐっと沈んで四、五米低くなったりする。その浮舟に、船員が二人がかりで客の体を両方からかかえて浮舟がもり上って来た瞬間に「ソーラッ」と放り込む。気の弱い者は青くなって、浮舟に放り込まれたトタンに舟底に突伏して仕舞う。雨でも降っていたら全くやり切れない。時々本船は港外迄来ながら浮舟が出せぬ為、客を下さずそのまま行って仕舞うこともある。早く千噸位の船が繋留出来る岸壁が出来て欲しいものだ。

種子屋久に通う定期船は、四百噸級で長福

丸(九州商船)、橘丸(鹿児島商船)、千噸級で戦後新造船の第一照国丸(中川海運)の三隻であったが、照国丸は奄美大島復帰に伴い昨年の暮から琉球航路に廻って仕舞い、今は残二隻で各四日に一航海と言うところ。昔は八重岳丸と言う四百噸級の船が居たそうだが、先の大戦で撃沈せられ、その跡釜に鹿児島商船で伊豆の大島航路に使われていた橘丸を買入れて就航することになったものの由。

尚、此の外に十島丸と言う百五十噸の船がある。これは三島村役場の持舟で、鹿児島安房間を往復し三日か四日に一往復するし、安房河口営林署岸壁に繋留出来るので、前記浮舟の苦しみは無い。然しこの十島丸も十島村航路に廻って来なくなって仕舞った。

今一つ、これは安房には来ないが、折田汽船会社の長運丸(百噸位)が、鹿児島―一湊―永田―栗生―口永良部島間を四日に一航海の程度で就航している。

下りトロ

下屋久営林署の森林軌道は、安房川右岸伝い約二十粁ばかり奥地原始林地帯に達して居る。有名な屋久杉、樅、栂などの巨木が営林局斫伐事業として伐られて、この森林軌道によって安房川口貯木場に下され、ここから鹿児島港や東京湾などに移出されて居る。

軌道はトロがその勾配によって自然に走り下り得るよう平均勾配下り二十分の一、軌間三十吋の所謂軽便軌道であるが、途中断崖を伝い森林を縫い隊道をくぐり深い渓谷を渡り延々奥地に延びて居り、上りはガソリン機関車で空トロ十台位を三台に積み重ねて曳き上げ、下りには各トロ一台に十石乃至十五石の原木を積んで二台連結或は一台宛のバラバラで十台位のトロが隊をなして下る。各トロには乗員一名乗りブレーキで速度を加減する。機関車は、下りに際しては前後に離れてこのトロ隊を護衛し、二十粁の軌道を約三時間で下る。

外来者が山に入る場合には営林署の許しを受けてこの上りトロに便乗させて貰うのであるが、軌道の沿線は、ヘゴ茂る亜熱帯の藪の中から刻々移り変る山の姿、物凄い渓谷など十分観察出来る。又下りは機関車にのせて貰うか、別に空トロを仕立てて貰いこれに乗り操縦者によってブレーキをかけつつ一瀉軌道を走り下りるのである。即ちこれが『下りトロ』である。

トロ一台には乗客先づ五、六名が限度。下りに当っては操縦者は常に前方を注視していないと、上って来る機関車に突然出会して衝突するかもしれない。殊にカーブで前方の注視がきかぬ所が危い。万一衝突したら最後である。脚下千丈、断崖転落、天国行間違なし。それで下りトロは予じめ電話で下と連絡をとり、上りのエンジンがあるや否やを確めて下る。又操縦者は特に熟練者でないと危い。

崖をめぐり隊道をくぐり高い橋を渡りつつ脚下千丈の懸崖上から安房川の清流奔湍を見下しつつ、一瀉走行する『下りトロ』のスリルは命がけでも悪くない。

小杉谷

安房川の中流を河口から約十粁遡るところに、両岸稍平坦地のある渓谷地帯小杉谷がある。ここ迄軌道を伝えば安房から十六粁ある。

ここは海抜標高約七百米、温度は海岸より平均四、五度低く、夏でも蚊は居らず夜具無しでは寝られぬ位涼しい。

下屋久営林署の林業事務所がここに置かれ事務所の外、製材工場、修理工場、寮、社宅、配給店など家が三、四十軒あり、約二百の人達が住んで居り、安房から毎日二、三回ガソリン機関車が空トロを曳いて上って来たり、又これから上流五粁の奥地で伐った原木を下すトロ隊が二、三回通過したりするので交通も便利であり、奥地林業の拠点となって居る。

去年、千尋滝発電工事が完成してから豊富な電気が引かれて、電灯は勿論、電気浴槽が出来、電気洗濯機、電髪、電気床屋など完備して、丸で電気の部落が出現して居る。

千尋滝とは俗称で本名は権現滝だと言う。滝は三段になって居り総落差約八十米、千尋とは支那式の誇張であろうが、千尋は百五十米であるから約二倍のかけ値がある訳だ。常流水毎秒七乃至八屯。

森林軌道は山の中腹を縫って居るから、トロに乗って山を上って行くと行手に中島権現岳が望見され、右下の遥か谷底に千尋滝が見下ろせる。少し水の多い時は中々壮観である。森林軌道にも滝見橋と言うしゃれた名の橋があり、粁程十粁附近の山鼻には粗末ながら展望台も出来て居る。ここから滝は眞正面に眺められ、中島権現岳は後に突き立ち、発電所も見えて中々良い景観だ。

千尋滝発電所は、滝に向って左手の小さい尾根を滝の上から隧道で貫き、滝から左百米ばかり離れた山腹に出で、水槽水圧鉄管を経て滝壺の横に、建家、変電所と並んで設けられて居る。滝に較べて甚だ小さく見ゆるのは滝の水を五分の一しか使っていないからだ。将来総合的に電源開発をしたとき水の減るのを慮って発電力千キロワットに止めてある。此の発電所は昭和二十八年一月、屋久島電興の手で電源開発の準備工事として出来たものである。発電力千キロワットでも島としては大きな力で色々の仕事をして居る。先づ営林署の林業、仁田鉱山、船行鉱山、早崎鉱山などの動力を全部電化し、安房始め附近部落に千灯以上の電灯を点してその偉力を示し、尚五、六百キロワットの余力を持ち、来るべき電源開発工事の工事用動力に備えて居る。

安房から森林軌道を利用し粁程十粁の展望台迄上り、あたりの景観を賞しつつ下っても僅々三時間で済む一つの屋久島観光ルートである。

乃木小屋

大正十二年、上屋久、下屋久営林署が分立し屋久島の林業開発施業案が始めて実施せられたとき、この千古未踏の原始林全山に亘り歩道が開かれ、各所に山小屋が設けられた。山小屋は巾五米、長十米ばかりの平屋小板葺、土間あり板の間あり炉ありと言ったもの。先づ中之小屋、花之江小屋、乃木小屋、三能山舎、大洞杉小屋、永田小屋、宮之浦小屋、下ノ小屋、障子岳小屋、愛子岳小屋、黐小屋など十余ヶ所、そして歩道には五百米毎に粁程標が打たれていた。これは恐らく林業関係の必要からであったろうが一般入山者にも甚だ便利であった。其の後二十余年、終戦後には山小屋は殆ど朽ち倒れて仕舞い、乃木小屋だけが只一つ残っていた。

筆者は昭和二十四年四月三日、花之江川から荒川流域を踏査して尾之間に下る途中、乃木小屋に一泊した。当時、歩道も殆んど判らぬ位になって居り、猟師と人夫各一名を案内兼強力として山歩きをした訳だ。

分水嶺から荒川側に少し下りた処に小屋は建っていた。暫く訪れる人もなかったのだろう。壁も一部はがれ、周囲には雑草が茂り荒れ果てていた。夕方五時頃だったと思う。中に這入ると炉が中央に切ってあり、いつ焚いたのか燃えさしの木片など散らばっているのを見ると何だか前に来た人がなつかしく思はれた。天幕、食糧品、其他用具を卸し、室内を一と通り掃除をし、外に出て清冽な清水を汲んで飯盒炊餐の用意をし、炉に火を入れてヤレヤレと落ちついた。

飯盒の飯に満腹し、飯盒の御湯でお茶をのみ、外に出て暮れかかる山の匂いを満喫する。山頂のこととて流れの音も聞えず全山眠るが如く静まり、鬱蒼たる原始林の木の間を透かして暮れのこる群峰の一角が僅かに望見される。多分、太忠岳か石塚岳の一部であろう。

ここは海抜千三百米、夜は四月と雖も未だ寒いので小屋の板敷に木の葉を厚く敷き、室内に天幕を張って風を防ぎ、その中に三人が背中をすり寄せて毛布を冠り早くねた。

山の中で猿と鹿しか居ない筈なのに、夜中床下で何かコソコソと音がするので猟師を起こして聞くと野鼠だとの事。人が来たので、すかさず餌をあさりに来たらしい。

やまもと　ひでお　上屋久町歴史民俗資料館長